

げんでん ふれあい 福井

2010 AUTUMN 第38号



ふくい県民総合文化祭

生誕百年に寄せて「白川文字学」と福井(下)

ふるさと福井「食育の祖 石塚 左玄(四)」



財団シンボルマーク

財団法人げんでんふれあい福井財団は福井県の文化振興とふれあいとゆとりのある地域づくりに寄与することを目的にしています。本誌はこの主旨に従い県民のみなさんとの絆を大切にしたい広報誌を目指します。

CONTENTS — 38

- ふくい県民総合文化祭 2
- 県高等学校総合文化祭 5
- 「白川文字学」と福井（下） 6
- ふるさと福井人物シリーズ
「食育の祖 石塚 左玄（四）」 8
- ふくいの伝統行事シリーズ
「海士坂の送り盆」 10
- 敦賀市立博物館誌上ギャラリー／32 11
- 福井の文学碑「作家 山本 周五郎」 12
- 福井の民俗文化 シリーズ 3
「耳川流域のカイロ講」 13
- 情報ファイル 14

FRONT COVER



福井県指定
無形民俗文化財
「海士坂の送り盆」
（若狭町）

若狭町海士坂（旧上中町）は鳥羽谷の最北部に位置する農村。「若狭郡県志」によれば、小浜市田島から山坂を越えて、海士（あま）が海産物の商いに通ったところから名付けられたとされています。県内のお盆の習俗のなかでも、精霊船とともにいつも特異な盆送りの行事として、当地の「送り盆」は大いに注目される場所です。

8月20日夜、大蔵寺（禅宗）で村役員や青年が集まり施餓鬼法要が営まれた後、観音堂前と村中、清水川馬場で青年による太鼓囃子を奉納。村境の遠土地川岸まで村人による松明行列が行われ、山の端馬場に組み立てられた巨大な蓋人形に点火し、お盆の精霊を供養します。虫送りとも習合した若狭を代表するお盆の火祭りです。（詳細は本誌10ページ参照）

ふくい県民総合文化祭（当財団協賛）は、平成17年度に本県で開催された「第20回国民文化祭・ふくい2005」の成果を踏まえ、子どもから大人まで広く県民が日常生活の中で優れた文化、芸術に親しみ、楽しみ、深く学ぶことができ、また県民一人ひとりの積極的な参加により、多様な文化の発表、鑑賞、交流の場として平成18年度より県民総合文化祭を開催しています。

第5回目となる今年度は8月から3月までの間にふれあいフェスティバル等が県内各地で開催されています。特に今年度は本年2月の「教育・文化ふくい創造会議」の提言を受け新規事業として「ヤングアートフェスティバル」を実施し、40才未満の若手芸術文化活動者の育成を図るとともに、県民が文化を「身近に見て、触れ、楽しむ」機会をつくることにより、文化への関心を高め、文化活動への参加を促す取組が特色となっています。

これまで開催された県民文化祭の一部をご紹介します。

太鼓ふれあいフェスティバル
福井県太鼓連盟主催の太鼓ふれあいフェスティバルが9月19日越前市のい

まだ芸術館で開催されました。県内の太鼓団体が日頃の練習の成果と交流の場として毎年開催されています。今回は県内よりジュニア8団体を含む16団体のほか、特別出演として石川県の「大場湯乃太鼓」と富山県の「越中いさみ太鼓保存会」が出演しました。特に今年は平成23年3月に愛知県で開催される第14回日本太鼓ジュニアコンクール福井県予選会も兼ねており、審査の結果越前市の「ハツ杉太鼓遊心」が選ばれました。フェスティバルのオープニングは越前市の「紫式部太鼓」と「越前権兵衛太鼓」による



ジュニアチーム和太鼓保存会 新（福井市）の演奏

福井県川柳大会

福井県川柳大会が9月26日、勝山市教育会館大ホールで開催されました。川柳は俳句と同じ五、七、五の定型詩で季語は含まなくてもよく、諸詠、風刺、機知を目的とするもの。

近年「サラリーマン川柳」がその年の流行や世相を反映しながら、サラリーマンの悲哀をユーモアたっぷりに表現し人気を集めています。当日は県下の川柳愛好団体「番傘ばんば川柳社」の県下、各支部15団体から106人が参加。

この「番傘川柳」は大正2年に岸本



福井県川柳大会での披露

水府と西田当百（小浜市出身）らが組織したもの。福井県の「番傘川柳ばんば」は長い歴史を誇り、月一回発行の「川柳ばんば」は昭和27年に発行されて以来、来年には700号を予定しています。参加者は事前に示されていた課題の「コーヒー」「二枚」「続く」「か

らくり」「未練」「砂」の6課題に一人2句、計12句を提出。審査は各支部長等6人が川柳の三要素といわれる「うがち」「おかしみ」「軽み」を中心に審査し福井県知事賞等を選考しました。会場の川柳愛好家は日頃、腕に磨きかけた作品を発表するとともに、その交流を楽しんでいました。

第20回 福井県市町文協選抜芸能祭

第20回福井県市町文協選抜芸能祭が9月26日、若狭町のバレア若狭音楽ホールで開催されました。

毎年県内の各市町持ち回りで開催され、17市町の各文協を代表する芸能部門が参加しています。

今回は若狭町の姉妹都市である大阪府高槻市の代表も含めた約270人の出演者が、邦楽演奏、合唱、ダンス、クラシック演奏等の見事な芸能を披露しました。

今回の芸能祭は、伝統芸能だけでなく



福井市の民舞

くフラダンスやクラシックの弦楽合奏等、バラエティーに富んだ芸能祭になり、地元の若狭町は最後に登場し、詩吟、吟舞、舞踊や合唱で、若狭町の豊かな自然、風土、偉人たちの功績を紹介した構成舞台「若狭郷歌」を披露し、大きな喝采を受けました。

芸能祭の運営委員は、「芸能祭を契機に、幅広い年齢層の方々に芸能に触れる機会を増やして芸能の輪を広げていきたい。」と話していました。

会場に詰めかけた約600人の観客は、各市町代表者の見事な芸能に盛んに大きな拍手を送っていました。

華のフェスティバル2010

福井県華道協会創立30周年記念となる「華のフェスティバル2010」が、10月15日から18日まで福井市ショッピングシティベル・あじさいホールで開催されました。福井県華道協会は日本の伝統文化である「いけ花」の伝承と発展を目指して、昭和56年に流派を超えて発足。今回のフェスティバルは協会加盟の11流派の会員が趣向を凝らした秀作を前期（15・16日）と後期（17・18日）に分け346点を展示。又あじさいホールのホワイエには協会加盟11流派の大作11作品が彩り鮮やかに展示されたほか小学生以下のジュニア部門の作品59作品も展示され花を添えました。

特に今回は創立30周年を記念し、各流派の代表ならびに常任理事等による役員席32作品の風格ある力作が展示されたほか、子供たちのいけばな体験コーナーが設けられ人気を集めていました。

会場は秋の草花のふくよかな香りが



季節感あふれる作品を鑑賞

漂うなか、会員はコスモス、ウメモドキ、ススキ、ハギ等秋の花を使い、「一枚の絵」のように美しさを表現していました。鑑賞に訪れた人達は「いけ花」に込められた秋の風景を楽しみ、見られていました。

第30回市町文協選抜美術展

第30回福井県市町文協選抜美術展が10月16日から18日までの3日間、鯖江市・響陽会館で開催されました。

この美術展は県内17市町の文協が毎年持ち回りで開催し、日頃の修練と研鑽に励んできた作品発表の場とともに、美術愛好家の交流の場になっています。今回、各市町文協より選抜された絵画、書道、写真、工芸の4部門の優秀作品353点が展示されました。

絵画部門では風景や人、静物を題材に101点、書道では漢詩、前衛書、かななど89点、写真では郷土の自

然、祭りなど57点、工芸部門では陶芸、押し花、能面など106点が展示されました。各部門の展覧作品とも郷土色豊かな作品が目立ち、地域における美術活動で磨き上げた感性豊かな作品に訪れた人々は文化の秋を飾るにふさわしい美術展をじっくり鑑賞し、秋のひとときを楽しんでいました。



多彩な作品が展示された県市町文協選抜美術展

越前和紙国際絵画アートフェスティバル

平成22年度、ふくい県民総合文化祭の新規事業として、若者の文化芸術活動を育成支援するヤングアートフェスティバル「日中アート交流 合同作品展」が10月17日から31日まで越前和紙の里・卯立の工芸館で開催されました。このヤングアートフェスティバル事業は県教委が本年度初めて開催するもので、これまで企画コンペ、応募の中から3団体の事業が選定されています。選ばれた今回の事業は越前和紙の新たな活用を目指したフェスティバルで、中国で活躍するプロの画家5人と

日本人若手作家2人による「合同作品展」などを開催。越前和紙は襖紙、奉書紙など豊富な種類があるほか、多くの芸術家に和紙の風格と使いやすさ、強靱さ、保存の良さなどで愛用されています。中国では水墨画や木版画に人気がありますが、来日した中国人画家にこの良さを知ってもらい、理解を深めてもらうのがねらい。「合同作品展」では越前和紙を活用した水墨画、木版画など約80点を展示したほか、和紙を活用した木版画・中国画教室なども開かれ、中国人画家との文化交流とともに、越前和紙の魅力をアピール、発信したイベントになりました。



越前和紙を活用した合同作品展

2010ふくい県民総合文化祭

ふれあいフェスティバル参加事業一覧

福井県吹奏楽Topコンサート	8月22日
第62回福井県音楽コンクール	11月23日(祝)
太鼓ふれあいフェスティバル	9月19日
演劇ふれあいフェスティバル	
宇野重吉演劇祭2010	9月23日(木)～11月30日(火)
福井県川柳大会	9月26日
第20回福井県市町文協選抜芸術祭	9月26日
福井県華道協会創立30周年記念	
華のフェスティバル2010	10月15日(金)～10月18日(月)
第30回福井県市町文協選抜美術展	10月16日(土)～10月18日(月)
第121回福井県総合短歌大会	
日本歌人クラブ北陸短歌大会	10月24日
茶道ふれあいフェスティバル	10月24日
第5回邦楽ふれあいフェスティバル	11月7日
生活文化体験フェスティバル2010	11月9日(火)～11月10日(水)
能楽の祭典 第31回福井県各流合同能楽大会	11月14日
第41回福井県文学コンクール	11月18日(木)
第61回福井県総合美術展(県美展)	11月20日(土)～11月28日
吟詠剣詩舞の祭典	11月21日
2010ふくい詩祭	11月21日
秋季福井県総合俳句大会	11月23日(祝)
大正琴の祭典	2月6日
マーチングバンド・バトントワリング	
ふれあいフェスティバルビートセッション2011	2月6日
第5回福井県合唱ふれあいフェスティバル	2月20日
第20回福井県人形劇フェスティバル	3月5日(土)
民謡・民舞・民踊ふれあいフェスティバル	3月13日

ヤングアートフェスティバル

越前和紙国際絵画アートフェスティバル	10月17日(日)～10月31日(日)
ストリートアート倶楽部	10月16日(土)～10月31日(日)
ストリートパレット2010	
～ヤングアートフェスティバル～	11月22日(月)～11月25日(木)

茶道ふれあいフェスティバル

福井県茶道連盟和光会主催の茶道ふれあいフェスティバルが10月24日福井市の福井新聞社・風の森ゾーンで開催されました。茶道連盟和光会は昭和29年に発足、流派を超えて茶道の普及発展に努め、春の足羽山での茶会とともに秋の茶道ふれあいフェスティバルが同会の二大イベントとなっています。日本の伝統文化である茶道は、礼儀作法を大切に、お客をもてなし、茶事として進行するその時間自体が総合芸術と言われています。当日は連盟加盟14流派のうち6流派が参加。福井新聞社の風の森ホール、エントランス・ロビーなどを使い、流派ごとに席飾りなど趣向を凝らした茶席(抹茶3・煎茶3)を



各派のお茶を楽しむ来場者

を設け、それぞれ違った雰囲気を楽しむことができた茶会となりました。10時の開会と同時に茶席が満席となる盛況ぶり。夫婦、女性グループで訪れた人達は、お茶、お菓子を味わいながら秋の茶会を十分堪能していました。財団では各分野別フェスティバルに参加する団体の技能向上のため、助成制度を設けており、平成22年度は6団体に助成しました。

総合文化祭開催

みなぎる個性、多彩に文化の祭典

第21回福井県高等学校総合文化祭（当財団協賛）がテーマを「一人一人の色をのせ きらめく文化の華を咲かせよう」として、9月17日の高校演劇祭を皮切りに15部門にわたり、日頃の活動の成果を発表する祭典が平成23年2月16日まで県下各地で開催されます。これまでに開催された「高校演劇祭」「高校かるた大会」「高校芸術祭音楽フェスティバル」をご紹介します。

高校演劇祭



熱演するに愛女子高生

第64回県高校演劇祭が9月17日から20日まで、福井市、富山県、石川県の4市町村で開かれます。

この演劇祭は本年12月に富山県で開催される、中部日本高等学校演劇大会の選考会も兼ねており、金賞の2校に福井商業高校、勝山南高校が選ばれます。

した。

最近では少子化の影響で各校とも演劇部員の確保に苦労しながら、今回もスタッフ、キャスト約230人の生徒が参加し日頃の練習の成果を披露しました。審査の対象は作劇術、演技力、演出、音響照明、大道具等トータルで審査される団体競技。また今回上演された17作品のうち9作品が創作劇で、その内容も「高校生活」「老人問題」「家族」等、身近な問題を高校生の視点と新鮮なアイディアで表現した斬新な作品が目立ち、高校生の熱い演技に、会場から大きな拍手が送られていました。

かるた大会 （小倉百人一首かるた部門）

第12回福井県高等学校かるた大会が9月23日坂井市三国町の三国町社会福祉センターで開催されました。この大会は個人戦で有段者（A・B・C級）と無段者（D級）別に勝者を競うもので、当日は福井、高志、武生、藤島、三国の5高校から16人の選手が出場しました。

このかるた競技は、かつて平成16年徳島県で開催された、第28回全国高等学校総合文化祭で、本県選抜チームが優勝した実績があり根強い人気があります。またこの大会は本年11月に奈良県で

開催される近畿高等学校総合文化祭等の選抜メンバー選考会も兼ねており、有段者A級の優勝者北川亜寿香さん（武生高）ほか7人が選ばれました。このかるた競技はタタミの上の格闘技とも言われ、各選手は高度な瞬発力、記憶力、精神力をフルに活用し、追い迫る戦いを繰り広げていました。



真剣勝負のかるた競技

音楽フェスティバル （合唱・音楽部門）

第48回高校芸術祭音楽フェスティバル合唱・音楽部の合同発表会が、11月6日越前市文化センターで開催されました。今回で

の間、県下各地でフェスティバルが開催されました。越前市で開催された合唱・音楽部会では県下13校から150人の生徒が参加。日頃の練習成果発表の場とともに、交流の場もなっています。各校の合唱・独唱発表のあと、最後に今回招へいた講師の富澤裕氏の指揮で、13校参加による福井県合同合唱団130人が、「さみ 歌えよ」（谷川俊太郎作詞・信長賢作曲）「初心のうた」（木島始作詞・信長賢作曲）を高くらかに合唱し美しいハーモニーを響かせていました。



敦賀高等学校の合唱

第21回 福井県高等学校総合文化祭

◆主催 福井県高等学校文化連盟

- 第64回福井県高校演劇祭 9月17日(金)～20日(月祝)
- 第12回県高等学校かるた大会 9月23日(木祝)
- 福井県高等学校定時制通信制連合文化祭 10月31日(日)
- 第48回高校芸術祭音楽フェスティバル
- 合唱・音楽部門 11月6日(土)
- 日本音楽部門 11月10日(水)
- 器楽管弦楽部門 11月10日(水)
- 吹奏楽・マーチング部門 11月11日(木)
- 郷土芸能部門・吟詠剣詩舞部門 11月23日(火祝)
- 第19回全国高等学校文化連盟将棋新人大会県大会 11月6日(土)
- 平成22年度「高校生文芸道場」福井県大会 11月6日(土)
- 第12回福井県高文連新聞大会 11月7日(日)
- 美術・工芸、書道、写真展・特別支援学校作品展 11月11日(木)～14日(日)
- 第30回福井県高校秋季運動大会 11月13日(土)
- 福井県高校放送コンテスト新人大会 11月19日(金)～20日(土)
- 第35回全国高等学校総合文化祭弁論部門予選大会 H23.2月16日(水)

生誕百年に寄せて

「白川文字学」と福井(下)

戦後の国語教育を批判

文：佐野周一

筆者プロフィール



佐野 周一 氏
Shuichi Sano

1942年(昭和17年)12月、福井市生まれ。金沢大学法学部卒。1965年、福井新聞社に入社。新聞記者30年の経験を経て、同事業局長、専務取締役、特別顧問などを歴任。2009年6月に退任した。県の教育文化ふくい創造会議座長代理など務めた。現在、県詩人懇話会副代表、日本文字文化機構文字文化研究所理事。

漢字復権と東洋の回復

NHK総合のテレビ番組に「みんなで日本ゴ」(という番組がある。9月に2回に分けて、戦後の漢字廃止論が取り上げられ、GHQ(連合軍総司令部)の圧力で、漢字が廃止寸前にまで、追い詰められた歴史が放映された。15年に及び日中、太平洋戦争の敗戦によるショックと連合軍の占領と支配のもと、日本の伝統文化否定の教育や文化政策が推進された。漢字追放と民主化運動の名を借りて表記をローマ字化しようという動きが強まった。当時の文化人も、作家の志賀直哉が、フランス語にしたらいいとか、文芸評論家の桑原武夫らが、英語化を唱えたり、エスペラント語にしてはどうかなどさまざまな意見が出されたという。

そこで、日本国民は「難しい漢字」を本当に知っているのかどうか、日本国民の識字率を調査する全国的規模で国語テストが実施された。当時15歳から65歳まで、4700万人の人口のうち、無作為で抽出した15000人がテストに参加した。その史上最大の漢字テストの結果は、平均点が78点台という好成绩だった。

そこでGHQの責任者が、この漢字

テストを統括した日本人学者に対して、テスト結果を改ざんして、点数を下げて報告してくれないかと要求した。

この学者は日本語のローマ字化推進論者だったが、学者としての良心を貫き通し、きっぱりと拒否したという。歴史秘話も紹介された。占領・支配の究極の目的は、思想と文化の支配にある。このためには言語やその表記、そして名前まで変えさせようとする。敗戦直後、日本国民を見くびった、占領政策に、反撃を加えて、日本語と漢字文化を守り、民族の誇りとアイデンティティを貫いたのは、結果的には市井の日本国民の識字率の高さと、文化力であった。

「IT化で「漢」が復活

ローマ字はアルファベット26文字。漢字は戦前、4千字使われていたという。それに読み(音読みと訓読み)を加えると、同音異義などバラエティーに富んだ熟語や言葉遊びの世界まで展開されていく、豊かな体系と奥深い歴史を有している。

戦後、日本語のローマ字化は阻止されたものの、GHQの要請にも妥協しつつ、「日常でさし当たって使われる漢字」として、文部省は敗戦1年後、

昭和21年(1946年)に、当用漢字、1850字を決めた。この当用漢字は戦後35年間、運用され、昭和56年(1981年)に、時代とともに使用ひん度が高くなった字95文字を加えて、常用漢字1945文字となった。しかし、今春、文科省(文部科学省)は国語審議会の答申を受けて、29年ぶりに常用漢字として196文字を追加した。

その中で、「鬱(うつ)」という字が入っていて、話題になった。先行き見通しの暗い時代潮流とITの普及により手書きと違ってパソコンで難しい字も打ちやすくなった情報環境の変化も文字文化政策に反映されたと見られている。

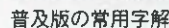
漢字制限と国語教育批判

こうした戦後60数年にわたる、文字文化政策の変遷の中で、白川先生は、戦後一貫して文科省の漢字制限と国語教育の在り方を批判してきた。わが国の文教政策に異議を唱えて、漢字復権と東洋の回復を切望してきた。

自宅書斎での白川先生

白川先生は、「連合軍の日本占領政策の中で漢字の廃止案が出ました。第一案がローマ字化せよ。第二案が仮名書きにせよ。第三案が、必要な範囲の若干の漢字を残す。私個人はどれも不賛成です。第三案を進駐軍と合意したのです。もし、漢字の使用がなくなったら、古典理解の道は閉ざ

例えば「島崎藤村の有名な詩で、小



また、最近のワープロ、パソコンの普及で漢字は手軽に打ち出せるようになったから、書けなくてもいい、読めさえすればいいのではないかという風潮に対して、『目から入る知識は通過してしまふんです。目で見ただけではダメで、脳に打ち込まないと本当の知識にはならない。やはり手で書くこと、手先から脳へ打ち込むことが大切』と指摘している。

福井でも文字教育に熱弁

白川先生は平成12年（2000年）11月に「漢字文化セミナーイン福井」で、戦後半世紀ぶりに故郷の福井に帰りして以来、平成18年（2006年）10月に亡くなる直前までの最晩年

中でも、平成17年（2005年）5月15日、ユー・アイふくい多目的ホールで開かれた講演会では、「文字教育について」熱弁をふるった。

万葉集の時代から日本語の歴史とその変遷を解き明かし、「明治の終わりから大正の初めに至って、わが国の文章は初めて国民的な文体として、言文一致の文章として完成した。つまり、わが国の文体は万葉の時代から数えて1300年近くかかって出来上がった

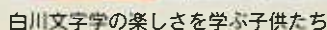


また、漢字の音読みと訓読みを使用することによつて国語を非常に豊かに発展させたと言ふ。白川先生はその事例として、日本語の「おもふ」という字について、説明する。面（おも）、「何か心におもふことがあると、

顔にはとと出ることを「おもふ」という。単純で素朴な「おもひ」だったが漢字が伝わることによつて「おもひ」の仕方やその中身が漢字によつて使ひわけて、表現されるようになった。頭の中が千々に乱れて「思う」、心をおもひ詰める時の「念ひ」、亡くなった人を「懐ひ」、遠方の人を「想ひ」、神さまの「訪ひ」を聞く「憶ひ」という字もある。漢字の表記を当てると、こんなに豊かな表現力があるにもかかわらず、「おもひ」は「思う」という字だけに制限したのは、とんでもない間違ひだと指摘している。

文字の国ふくい発信へ

白川先生は96歳で亡くなるまで、わが国の国語教育の在り方、文字文化政策を批判し続け、漢字文化の振興、発展に力を注いだ。



ことは生誕100年。県では白川
 静博士の偉業を改めて顕彰するため漢
 字文化をテーマとしたシンポジウム、
 講演会を開催。また、学校教育では白
 川文字学を生かした本県独自の漢字学
 習を県内全小学校で実施していくほか
 おとなを対象とする生涯学習、指導者
 育成など充実。「文字の国福井」を発
 信していく。白川先生の思想と功績を
 県民の誇りとして次世代に力強く引き
 継いでいきたいものだ。

【訂正】前号、「白川文字字」と福井(中)の記事中(5頁4段目)福井での講演会「マ2005年3月30日」は同13日に訂正します。

食育の祖 石塚左玄 (四)

石塚左玄の人となり・炎の努力家

文／岩佐勢市

筆者プロフィール



岩佐 勢市氏
Seiichi Iwasa

1949年福井市に生まれる。鳥取大学卒業。JA経済連・JA厚生連に奉職。前JA福井県厚生連理事長。職務の関係から住民健康管理のうえで、特に子供の食育に注目。現代の子供達の食生活の乱れを憂う。自らもスローフードの研鑽ならびに、福井市生まれで食育の祖と言われる石塚左玄の研究を進め、業績の紹介とともに、食育の重要性の啓蒙と、食と運動による健康づくりを提案している。石塚左玄の業績に詳しい。

桜沢如一が書く 石塚左玄

石塚左玄の食の思想を解説している本も最近は多くなりつつありますが、左玄そのものを語っている本は殆どありません。まして左玄の福井時代に言及して事実を語っている本は皆無です。そうした中で最もポピュラーでポリウムが最大であるのは桜沢如一(※1)が左玄の死後20年程後に書いた『石塚左玄』があります。

この本には左玄の思想や人格も含めて多岐に渡って幅広く書かれています。が、残念な事に左玄の死後に書かれたものであり、最も致命的であるのは生前の左玄に直接会って聞き取りしたものでないのです。左玄の理論や思想については左玄が書いた本や桜沢如一自身の食養会での活動で十分な記述がされていますが、左玄個人の略歴や人格等は間違っている記述があり左玄の全てを知るには不満足な面があります。桜沢如一はその序に左玄を次のように評価しています。

「左玄は明治年間において最も徹底的

に非日本精神に対抗し、最も壮烈な戦いを戦い、かつ最も悲惨な最期をとげた唯一人の精神的戦士である。彼の奉公は明治維新の忠臣の何人にも決して劣らぬ。(略)彼は東洋独特の幽玄なる哲学を西洋科学用語を持って解説した一人者である。」

左玄は決して国粹主義者ではありませんでしたが、時の政府が率先して欧米等先進国の制度・文化・思想導入を図り、それに合わせる様に日本の食生活・食文化が洋風化に激変し、日本古来の食生活が壊れていくのを現実として受け入れる事は出来なかったのです。純粋な国粹主義者ならば、あらゆる面で洋風化に反対の意を唱えたでしょう。

グリフィスに 学ぶ化学

左玄は積極的に洋風化の意味合いを持つ「化学」をグリフィスから学び、左玄の書いた本にも「化学」と言う言葉を使ったのです。左玄は欧米の「化学」に憧れ、先進国の学問である「化学」の導入に全力で取り組んでいたのです。そして左玄は食の心・真・信・

力・美を求め続け日本人本来のあるべき食について多くの人に警鐘を与えました。

グリフィスの来福時には、昼は病院で働きながら、夜には彼を訪ねて保健学等の勉強を請い、グリフィスが離福するとその後を追って助手になりました。当時の左玄にとって医学等の最先端学問を学び得る事が可能な方法は、グリフィスからのみでした。藩医であれば、藩命で長崎にオランダ医学の勉強も不可能ではなかったでしょうが町医の身ではそれもかなわず、彼なりに身近で西洋の化学や医学を勉強する手段を模索したのです。当時の著名な医師の大半は欧米に留学の経験があり、日本と違った化学的文化・文明を肌で感じ、西洋医学を身に着けて帰国しましたが、左玄はついに留学する事はできませんでした。しかし左玄の脳裏にはグリフィスから学び取った化学の思想があり、誰よりも化学という概念を強く意識づけ、自分こそが最初に化学を学んだ者であるとの強い自負心をもっていました。その認識があるからこそ、故意に「化学的食養長寿論」とか著明な「食物養生法」も一名化学

西洋科学用語を 持つて

左玄は日本人として護らなければならない伝統と新しく洋風化すべき事と明確な基準を持っていました。

左玄は西洋の先進的事項をしつかり学び取り、その上で日本人に何が大事であるかを訴えました。そこで左玄は食物の3大栄養素である炭水化物・タンパク質・脂質の栄養価値を根幹として食べる西洋の栄養学よりも、体内で吸収摂取される栄養そのものが人にとってより重要であると考えて西洋の栄養学を否定しました。後述しますがその栄養摂取に当たってはミネラルのNaとKが大きな役割を果たしているという無カロリーのミネラルの重要性を説きました。結局のところ、日本になかった欧米の「化学」によって日本人の食を解き明かそうとしたのです。

その事は欧米の栄養学・医学でなくして日本古来の漢方医学の中に化学的食

養法を見つけることに全力を挙げその論議に海外の栄養成分データを駆使し理論づけをしました。それはミネラルのNaとKのバランスが栄養摂取を左右すると言う夫婦亜児加里論に繋がっていきました。

桜沢如一が本の中に書いた「西洋科学用語を持って」とはこういう意味です。

海外の参考資料

今に伝わる左玄が残した書籍や書類の中には海外の資料から参考にしたものも見受けられます。

「独逸陸軍衛生政體大意抜萃」は陸軍軍医の藥劑監として「調劑局之部」を選び出して残しています。イギリスの参

考資料は3点残っています。

「英国

軍医部

条例抜

萃」英

国版

衛生

辞書抜

萃」検

尿法」

「包厨

概則」等薬剤・水に因る疾病・厨房の衛生管理が書かれています。

左玄は先進海外からの事例も学ぶべきは積極的に学び取り、それを実践したのです。



独逸陸軍衛生政體大意抜萃 表紙と一部

炎の努力家 左玄

私が石塚左玄の人格を述べるならば、形容する言葉としては、勉強家・努力家が最適と考えています。それは反骨精神と裏表の関係ですが、両者が相まって左玄の人となりをつくり、その事が業績でも食育の祖として完成させたのです。

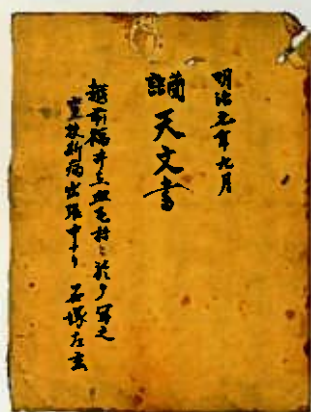
左玄の勉強家・努力家の実態を彼が書き写し今に残る『蘭語天文書』が証明しています。

明治元年17歳の時でした。左玄は福井藩医学学校で雇いという形で勤務をしていました。ところが福井の皿毛村において窒扶斯病(チフス)が発生したので上司から現地に治療出張を命じられました。左玄は日中には患者の診察等を行い、約1ヶ月間現地に寝泊ったのです。

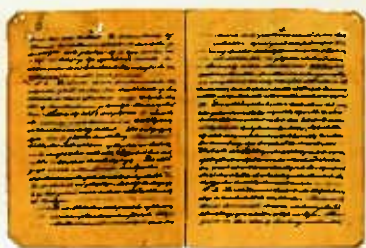
現地に行く時に医学書を持参して勉強をしたかったのですが、当時の洋書は高価で貴重でもあり、そんなに簡単に洋書本を貸してくれる者はありませんでした。しかし漸くに蘭語の天文書を1冊借りる事が出来、天文学は門外漢であつたのですが、左玄は喜んで現地に持参しました。

その時に仕事の合間を縫って借りてきた蘭語の天文書を自筆で一ヵ月かけて書き写しました。

オランダ語は医学書を読むのに当時は重要でしたが、医学書と関係のない天文書を電気もなく、まともな文房具もない当時に、僅かの蠟燭の灯りをたよりに、17歳の青年がただ只ひたすらに必死に筆写している姿は時空を



蘭語天文書 表紙



筆写したオランダ語



筆写した天文図

測され、左玄のひたむきな努力と人間性が同われます。左玄の勉学に対する情熱・熱意は現代人から見て並外れたものであり、17歳とは今の高校2年生になります。左玄のこのような努力があればこそ、後世にも通じる食育の祖になったのです。

左玄がいつからどのようなようにオランダ語やドイツ語を学んだかは分かっていません。しかし10歳年下の同じ軍医森鷗外は8歳からオランダ語を10歳

からドイツ語を日本人の通訳から習っています。今の本屋にはありふれるほどの参考書もありますが、当時全く無い中での勉強です。高校を卒業しても満足に英語をマスターできない現代とは何が違っているのでしょうか？

勉強をする環境も余りにも恵まれません。恵まれないために、結局自分のものにならないのです。食も飽食で病気の元凶です。『過ぎたるは及ばざるが如し』が言い当てています。

私は左玄から今一番の教育である「食育」を学ぶ事も当然大事なことだと思います。実際左玄以上に確に現代食について考えさせる人も存在しませんが「食育」もさることながら、現代の17歳の世代はもとより全ての人が(特に17歳の親達)この『蘭語天文書』から忘れてしまった何かを得ることが出来るのではないのでしょうか。努力とはどんな事をすれば努力と言えるのか？勉強とはどのような事が勉強なのか？左玄の残したものが食育を通して人としての人間力を育てる事にも繋がるのではないのでしょうか？

※1 桜沢如一(1893-1966) 京都市生まれ。石塚左玄死後の1911年に、貧困も重なり病気がちであつた時左玄の食養思想を知り、その実践で健康を回復した事で、左玄の食養思想を発展させマクロビオティック運動を提唱しアメリカ・ヨーロッパ等に普及推進を行う。門下生にアメリカでマクロビオティックを普及させた久司道夫氏や正食協会岡田定三会長らがその際たる伝道者となっている。

ふくいの

伝統行事

福井県指定無形民俗文化財

「海士坂の送り盆」

若狭町

盆の精霊供養

お盆というと、もっぱら餓鬼道におちた木蓮尊者の、亡母の苦難を救うための施餓鬼供養が始まりとされ、推古14年(606年)・斎明3年(657年)など仏教渡来初期に孟蘭盆会が行われ、全国に波及したといわれています。しかし、それはあくまでも文献による史実であり、実際の盆行事をみれば、仏教伝来以前の日本古来の他界信仰や靈魂観が色濃く残存していることが分かります。

毎年お盆になると、ご先祖や仏、亡者・餓鬼と呼ばれる無縁仏が各家を訪れてくるという去来信仰は、本来仏教の教えにはなじまない、原始的なアニミズム(精霊主義)に基づく民俗信仰が基本にあり、迎え火や送り火を焚いてお盆の精霊を手厚く送迎いたします。ちなみに、正月に訪れてくる年神(正月神、歳徳神)も先祖神(祖霊)とされています。

県内の海岸ぞいの村々には、藁製の精霊船を流して盆送りをする漁村がいまなお数か所ありますが、巨大な藁人形を燃やしてお精霊さんをあの世へと手厚く送り返す、若狭町海士坂の送り盆はきわめて珍しい火祭りであり、一夏の風物詩といえるでしょう。

火祭りとしての送り盆

旧上中町海士坂は、鳥羽谷最奥ののどかな戸数50戸の農山村で、「若狭郡県志」によれば、小浜市田島の手が海産物を商うるために、村境いの山坂を越えたことから名付けられたとされています。現在は海士坂トンネルが開通し昔の峠道の面影はありません。

さて、当地の送り盆は当日の昼間から山の端馬場で、当番によって藁や棒竹で3メートルほどの人型が組み立てられ、準備が着々と整い、夕刻から菩提寺の大蔵寺でまず正装した区役員と青年代表が列席して本堂で施餓鬼法要が営まれます。その後、境内の観音堂で青年による勇ましい太鼓囃子が奉納され、住職や区役員・青年たちが村通りを道中行列をして清水川馬場に移動し、「兵威」「きりぎん」「獅子上里(ししや)



大蔵寺住職による施餓鬼法要

ざり)」「宮がかり」「猿の舞」「ほていさん」「甚句」「山戻し」などの太鼓囃子を区

民に披露いたします。

村中の各家が力やで作った松明を銘々掲げて、三三五五に松明行列が農道を行き交い、村境いの遠土地川の岸辺に松明を奉納し、お精霊さんを送ります。途中の山の端馬場の広場では、区長が提灯の火で藁人形に点火し、導師の大蔵寺の住職による莊重なお経がとなえられ、太鼓囃子が火勢をあおるように囃されます。夜空を焼き焦がすように藁人形が燃え崩れ、参加者は団子や線香を供えてお精霊を供養し、藁人形が燃え尽きると送り盆の行事が終了となります。うらさびしいような気持ちを抱いて銘々帰途に就くのも、お盆に訪れてこられたお精霊さんを、送り届けた安堵



大蔵寺境内観音堂前での太鼓囃子

の気持ちの裏返しかもしれません。古老は盆送りの煙に乗ってホトケサンがあのに帰られると話しておられます。

虫送りと送り火の民俗

送り盆の行事のなかには、東北や関東、中部地方など、各地に大きな火祭りを行うところがあり、なかには「ヒヤクハツタイ」と呼ばれる百八本の松明を燃やしたり、大きな柱を広場に建て、その先端の籠に松明を投げ込む「柱松」と称する盆行事も各地に見られます。嶺南地方では南川流域の「マツアゲ」はその代表的な年中行事です。とはいえ、松明そのものがヒトガタ



海士坂集落の道中行列

人形燃しは送り火の柱松明が村共同の聖火として点火され、それが盆に去来する祖霊(先祖霊)の姿を示す人形として燃やされるのは全国的にも珍しい行事とされています。

お盆に訪れてくる精霊は、かならずしも先祖やホトケばかりとは限らず、亡者や餓鬼などの招かざる悪霊もいて、田畑の作物に被害をもたらす害虫も浮かばれない靈魂(御霊)の仕業と考えられてきました。村外れの遠土地川まで農道を銘々松明をもって行列をするのも、「虫送り」の習俗とされているのはよく納得できることです。

また、戦後間もなくまでは当地でも当日六斎念仏が行われていたと伝えられており、若狭地方の盆行事の多様性を示すものとしても注目されます。なお、海士坂の送り盆は以上の理由から平成20年度に福井県無形民俗文化財に指定されました。

であったり、人形型の送り火はあまり知られていません。あえて事例をあげるとすれば、近年観光行事として有名になった京都の太文字の送り火が、「大」

「大」の字を基本としてヒトガタを象っているとする説も唱えられています。海士坂の

狸砧図 一幅

河鍋 曉斎 筆



- 落款「惺々曉斎」
- 絹本着色
- 印章「曉斎」朱文方印
- 縦41.0×横46.5cm
- 江戸後期〜近代（明治）

艶やかな女性が、月明かりのもと、川辺で砧を打つ姿である。「砧」とは、織物の織目をつぶして柔らかくし、つやを出すための用具で、平坦な台に乗せて木槌で叩くこの作業を砧打ちと呼ぶ。一見すると秋の夜長の農家にみられる光景であるが振袖姿で農作業をするという不自然な図となっている。よくみると、裾には尻尾が覗いており、美女に化けた狸が戯画風に描かれている。振袖には農作物を荒らす獣を追い払うための鳴子も描かれており、それを纏う狸の姿に風刺が折り交ぜられている。

背景となる秋草の隙間には、仲間と思われる狸が顔を覗かせており、滑稽さが興を引く作品となっている。

作者の河鍋曉斎は、駿河台狩野家の洞白・洞春に学ぶが、後に歌川国芳に浮世絵を学び、歌川豊国にも師事した。一方で、大和絵の絵巻物一なかでも鳥羽僧正の筆意を倣い、美人画は浮世絵、可笑しさを誘う画趣は鳥獣戯画を描き、これが狂斎と号する機縁となった。

河鍋曉斎は、天保2年（1831）下総國葛飾郡古川に生まれた。名は陳之、惺々狂斎と号したが、酒興に描いた風刺が当世を諷刺するものとして投獄されたのを機会に、明治4年（1871）に「狂」を「暁」に改めた。周曆・畫鬼・畑狂者・酒乱斎・雷酔・賣畫狂者・如空入道などの号がある。明治22年（1889）62歳没。

福井の文学碑

作家 山本周五郎

名作「虚空遍歴」の舞台

「人間が一つの仕事にうちこみ、そのために生涯を燃焼しつくす姿。」私はそれを書きたかった。こんにちを充分生きる、こと以外に人間の人間らしいよろこびはないのだ。

こんど今庄の町へゆき、日野川の流れを見たとき、私はひそかに、作中の中藤沖也に向かって囁いたものだ「ごころうだったね」。

北陸自動車道の今庄インターを降りて日野川に沿った国道365号を車で10分ほど、国道に面し、南越前町今庄



山本周五郎の文学碑

総合事務所（旧今庄町役場）に着きます。その広い敷地の一角に、庭木を植え込んだ小高い築山があり、そのてっぺんに山本周五郎文学碑があります。

芸道一筋・孤独に死す

日野川で見つけた輝緑凝灰岩の自然石が使われており、高さ1.5m、横幅3m余りの重厚な石の真ん中に碑面が埋め込まれています。

なぜ、山本周五郎と今庄なのか、ちよっと、戸惑いますが、実は、山本周五郎の長編小説「虚空遍歴」下巻に、ここ今庄の地が登場し、小説のクライマックスの舞台になっています。碑文で「ごころうだったね」と作者に声かけられているのが、主人公の中藤沖也。

沖也は侍（旗本）の身分も棄てて芸人の世界に飛び込み、「沖也節」の端唄で、江戸はもとより全国にも、もてはやされる人気のある芸人でした。

しかし、その境遇に満足せず、端唄と縁を切り、本格的な浄瑠璃の作曲を目指す。そのため家族を残し、世間の実人生を学ぼうと、江戸を発つ。東海道を下り、浄瑠璃発祥の地、上方へと向かう。道中、若いころの刃傷沙汰のうらみを買われ、仇討ちの追手に襲われたり、病いに犯されたりして、苦



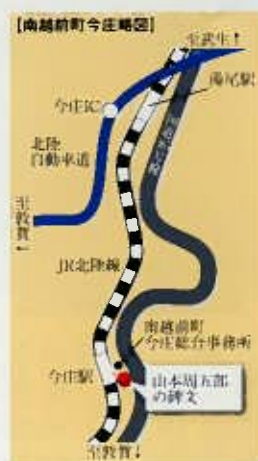
板の木津に近い板取の宿

労の連続。上方でも、沖也に群がった芸人にだまされ、食いものにされます。再起をかけた浄瑠璃作品の京都公演にも失敗。金沢のツテを求めて北陸へ。板の木津の山峡を越えて板取から今庄にたどり着き、しばらく滞在します。「沖也節」をしたって追いかけてきた江戸の女、「おけい」と再会。元気を回復して金沢へ向かいます

が、ここでも受け入れられず、再び今庄に戻ります。今庄の旅館で絶望と病苦の中で、「おけい」に見守られながら臨終を迎えるというストーリー。芸道ひと筋、浄瑠璃の新しい曲作りを目指し、世間の冷たさに抗しながら悪戦苦闘し、志半ばにして死んでいく男の孤独の生きざまを描いています。

主人公沖也の心の故郷

山本周五郎は明治36年（1903年）山梨県北都留郡初狩村（現・山梨県大月市初狩町下初狩）の生まれ。本名清水三十六（さとむ）。大正5年（1916年）に尋常小学校を卒業後、東京・銀座の質店「山本周五郎商



店」に徒弟として住み込みます。いろいろなペンネームを使っていますが、出世作「須磨寺附近」から山本周五郎に定着。この「虚空遍歴」は昭和36年3月から2年間「小説新潮」に連載され、昭和38年に上・下二巻、新潮社から出版されました。「樅の木は残った」（昭和31年）「ながい坂」（同41年）と並び、晩年の周五郎文学を代表する本格的長編小説と言われています。

山本周五郎は「虚空遍歴」の執筆を含めて、今庄を2回、訪れています。小説の中で、主人公、沖也は日野川の風景を前にして「おれはこの川が好きだ」、「向こうの山も、今庄の町もこの川をひっくるめて、おれは自分の故郷のように感じられるよ」と語っています。主人公、沖也の第二の故郷であり、終えんの地となった今庄の宿に、文学碑が出来たのは、昭和49年（1974年）11月1日。山本周五郎が昭和42年（1967年）、63歳で亡くなってから7年後でした。そして同時に建てられた脇碑には周五郎文学の研究者木村久彌氏が「今庄こそ自分のふるさとのように感じられるという沖也のころは、同時に北陸路を愛してやまなかった作者の詐らざる心情でもあったに違いない」と書いています。

今庄は山本周五郎の心の故郷だったのかも知れません。



代表作「虚空遍歴」

福井の民俗文化

暮らしの
— 古典 —

美浜町耳川周辺の戸祝い行事

シリーズ 3

戸祝いとは、家々の門口で祝言を唱え、家内安全・五穀豊穡を願う門付け芸のことで、若狭全域で行われています。

また若狭地方では、村から災厄の象徴である狐を追放する「キツネガリ」との習合がみられ、呼称もキツネガリに近い「ガリアイ」「カイロ講」であったり、「戸祝い」であったりとさまざまです。

実際の行事の内容としては、どこも子ども達が集団で集落を回り、槌などで門口を叩きならし、めでたい文句や歌を歌うと村人が菓子や小銭を与えるというものです。

福井在住の民俗学者・金田久璋氏によれば、小正月の行事として若狭地方では現在も全集落の1割に当たる20集落で行われており、またかつて行っていたという集落も多数あります。比較的広く普及している行事といえます。

美浜町ではかつてはほとんどの集落で行われていたと思われますが、現在では、38の集落のうち中寺区・新庄区・佐野区・坂尻区・北田区の5集落に行事が残っています。このうち耳川周辺の3集落で行われている戸祝い行事について紹介します。

中寺の「戸祝い（カイラホ）」

小学生以下の子ども全員が男女問わず参加します。幼い子は親が抱いて行ったり、代わりに回ることもありま



中寺の戸祝い（写真提供：美浜町）

子ども達
はまず集落
内の西宮神
社に集合し、
反時計回り
に集落を回
ります。初
めの2回は
次の狐の歌
を歌います。

カイラホ カイラホ
狐の寿司は 七桶ながら
八桶に足らんとつて
狐がえるがえるよ

そして最後の1回では各戸をまわり、次のようなめでたい歌を歌うと、村人からお菓子が渡されます。

戸祝いますよ 今年の年は
めでたい年で
門には門蔵
背戸には背戸蔵
おっとりまわして
すっからかんのかんよ

歌詞からして「キツネガリ」と「戸祝い」の意味を使い分けていると考えられます。

かつては

松竹梅や蔵の絵を描いた小槌を持ち、戸口を叩いていましたが、戦後あたりからは小槌を使用しなくなりました。



中寺の戸祝いの小槌

新庄の「カイロ講」

新庄の字ごとに行事が行われます。ここでは男子だけが行事を行っていましたが、近年では少子化に伴い女子も参加しています。家々から餅やお年玉をもらいます。歌詞は中寺と同通するものですが、キツネガリと戸祝いの内容が1つの歌に盛り込まれています。これは次の佐野でも同様です。

佐野の「祝いましょう」

佐野では1月4日の夕方、小学1年から中学3年までの男子が行事を行います。子ども達はテゴ（手籠）と竹の棒を持ち、中寺や新庄と同様の歌を歌いながら、各家の玄関先の地面を敷し

く叩きます。竹の棒は身長ほどもあり、先が割られています。
ここでは子ども達にお年玉やお菓子・果物や干柿、または学用品が渡され、行事の後に平等に分ける様子が見られました。



佐野の「祝いましょう」

このように各家の玄関で歌を歌い、対価を得るという行為が物乞いのようであるとの考えて、昭和初期ごろには教育者などに中止された集落も多いとのこと。特に嶺北地方では全くこの行事を知らない方が多いのではないだろうか。

しかし近年、特に大都市圏では子ども達が仮装して家々を回り、お菓子をもらっている様子をテレビなどでよく見かけます。そう、カトリックの行事ハロウィンです。菓子業界などではクリスマス・バレンタインに次ぐ商戦が繰り広げられているとも聞き、オレンジ色のカボチャのお化けは雑貨店などでご覧になった方も多いのではないのでしょうか。

それならば日本古来の行事である戸祝いがもう少し見直され、復活してもよいのでは、と考える昨今です。

（若狭路文化研究会 成田かおる）

神戸北ホテル

劇団民藝 福井公演



奈良岡朋子さんから熱演の神戸北ホテル
(写真提供 劇団民藝)

「劇団民藝」の福井公演「神戸北ホテル」が7月3日福井市文化会館において福井新聞主催（当財団協賛）で開催されました。演目は劇作家小幡欣治（新

劇戯曲賞、菊田一夫演劇賞大賞受賞者）作の「神戸北ホテル」。戦時下の名前こそしやれてはいるものの、築50年、老朽化した神戸のホテルが物語の舞台。主人公演じる奈良岡朋子さんが戦争一色に染った暗い厳しい世で、時代の激流に翻弄される庶民の怒り、悲しみ、やるせなさやバイタリティーを独特のユーモアや哀歓をこめて好演しました。

この戯曲は平成22年1月に優れた新作戯曲に贈られる「第13回鶴屋南北戯曲賞」に選ばれています。会場には約400人の演劇ファンが訪れ劇団民藝の公演を楽しんでいました。

げんでんふれあいコンサート

谷村新司さん熱唱

当日は仁愛女子高等学校のコーラス部15人も参加、坂本九さんの「心の瞳」を合唱したあと、谷村さん作詞・作曲「咲



甘い歌声でファンを魅了する谷村さん

される大きな拍手が沸きました。曲の合間には谷村さんが自身の人生観、音楽観などを軽妙に語り、最後に「昂」を熱唱し来場者から絶賛の拍手を浴びました。

谷村新司さんを迎え「ココロの学校」と銘打ち「げんでんふれあいコンサート2010」が10月3日、福井フェニックスプラザで開かれました。「ココロの学校」は「音で始まり、歌で始まる」をテーマに、谷村さんのココロを揺さぶる歌とトークで彩られた移動学校。

きほこる花のように」を会場の皆さんとともに合唱し、大きく盛り上がりしました。

コンサートは、長い芸歴と数々のヒット曲を世に出してきた谷村さんの出演とあって、会場には満席となる約2000人が来場。「三都物語」「いい日旅立ち」等甘美な歌声が次々披露

京都市交響楽団オーケストラコンサート

バレア若狭開館5周年特別事業



京都市交響楽団オーケストラと齋藤さん

身で日本を代表するバイオリニスト、戸田弥生さんと福井県出身者二人の共演となりました。京都市交響楽団は「京響」の通称で、昭和31年に日本で唯一の自治体オーケストラとして創設（現在京都市音楽芸術文化振興財団が運営）された我が国を代表するオーケストラ。指揮



開館5周年目のバレア若狭

指揮者を務めたのは大野市出身の齋藤一郎さん、バイオリンは福井市出身の戸田さん。齋藤さんは東京芸術大学大学院で指揮を学び平成10年文化庁派遣の研究員としてウィーンで研鑽を積み、現在セントラル愛知交響楽団の常任指揮者。また当財団の将来有望な若手芸術家育成のための「特別奨励金」の初めての受給者でもあります。また戸田さんは、桐朋学園大学を卒業後、アムステルダム、スウェーデンの音楽院に留学、平成5年エリザベート王妃国際音楽コンクール優勝。国内外の主要オーケストラで活躍しています。コンサートではエルガーの「セレナーデ」やモーツァルトの「交響曲第36番」を齋藤さんが全身で指揮棒を振りきり



戸田さんと齋藤さんの共演

「京響」を指揮しました。モーツァルトの「バイオリン協奏曲第5番」では戸田さんの繊細で情感豊かなバイオリンが披露されました。齋藤さんとの呼吸もピッタリに共演し、会場の340人の聴衆を魅了しました。

五番町夕霧楼(竹人形文楽劇)

水上文学のふる里・若州一滴文庫で公演



若州一滴文庫 くるま椅子劇場

おおい町出身で直木賞作家、故水上勉氏が設立した人形劇団「若州人形座」の竹人形文楽劇「五番町夕霧楼」の公演が9月18、19日の両日、おおい町岡田の若州一滴文庫くるま椅子劇場で開かれました。若州一滴文庫は当町出身の水上氏が昭和60年約7000㎡の敷地に私財を投じて建設された図書館、くるま椅子劇場、竹人形館等からなる文化施設。(現在は地元有志によるNPO法人「一滴の里」が継承)

「若州一滴文庫」での竹人形文楽劇は、春と秋の定例公演が行なわれていて、これまで昭和60年のこけら落として「越前竹人形」の公演以来「はなれ警女おりん」「苗根崎心中」等多数上演され、今回上演の「五番町夕霧楼」も今回で3回目の公演。「五番町夕霧楼」は昭和37年発表の水上氏の小説。昭和25年に起きた金閣寺放火事件をモ



若州人形座による「五番町夕霧楼」の上演

チーフにした同氏の小説「金閣炎上」が原作。戦後まもない昭和25年ごろ京都西陣の色町・五番町夕霧楼に家族を養うために丹後からきた少女と、その幼馴染である学生僧の悲恋の物語。この竹人形文楽劇を楽しみにしている全国の水上文学ファンも多く、18日の公演では遠くは北海道から九州まで、満席となった入場者約270人の半数以上が県外からの来場者。竹人形の素朴で力強さを持つ人形と語り手、人形遣いが三位一体となり、水上文学と竹人形が織りなす幽玄の世界を楽しんでいました。



「五番町夕霧楼」ポスター

文化講演会「長生きするための食事学入門」

永山久夫氏(食文化史研究家・食文化研究所長)

当財団と福井県連合婦人会が共催して7月24日、福井市の福井県生活学習館において食文化史研究家・食文化研究所長永山久夫さんを招き、「長生きするための食事学入門」と題して文化講演会を開きました。

永山さんは食文化研究家としてテレビやラジオで幅広く活躍。著書としては、「長寿食365日」「和食のすすめ」「日本人は何を食べてきたか」等、食や健康に関する著書多数。講演で永山さんは、「これからの長寿社会を元気に暮らすための健康食に注目。特に「米、豆、魚、梅干、人参、卵、茶」の効用を事例にあげ説明し、健康を支える正し

い食習慣と自分の健康管理は自分で守り、日常生活では積極的に出し、ストレスを溜めず笑いのある生活が大切。」と提言しました。誰も関心ある食、健康がテーマだけに婦人会の皆さんは興味深く熱心に聞き入っていました。



健康食について講演する永山久夫さん

若手ピアニスト 大谷研人さん

2年ぶりに福井でピアノリサイタル

福井市出身で、国内外で活躍するピアニスト大谷研人さん(19歳。げんてん有望新人芸術家支援制度受給者)のピアノリサイタルが7月23日福井市の響のホールで開かれました。

大谷さんは5歳からピアノを始め、10歳からクラシック音楽の本場ドイツのほかハンガリーへ留学、研鑽を積み重ねています。これまで2008年イタリアで開かれた「バルレッタ国際音楽コンクール・ピアノ部門1位」など輝かしい成



大谷研人さんピアノリサイタル・響のホール

果を上げています。今回のリサイタルは、今年9月からのベルリン国立音楽大学への入学を控え、一時帰国での演奏会で福井では2008年ハーモニーホールでの演奏以来2回目。演奏会ではリスト作曲「メフィストワルツ1番」ほか6曲を披露し会場を沸かせました。

満席となった会場からは福井出身の若いピアニストの活躍を期待し、盛大な拍手が送られていました。

平成23年度 財団の助成を受けたい団体を募集 申請期限4月20日(水)

財団では、文化団体等の事業活動を支援するため「財団助成事業取扱規程」に基づいて助成をしています。平成23年度において文化活動等の事業を行うため、財団の助成を受けたい団体を募集しています。

対象団体の要件

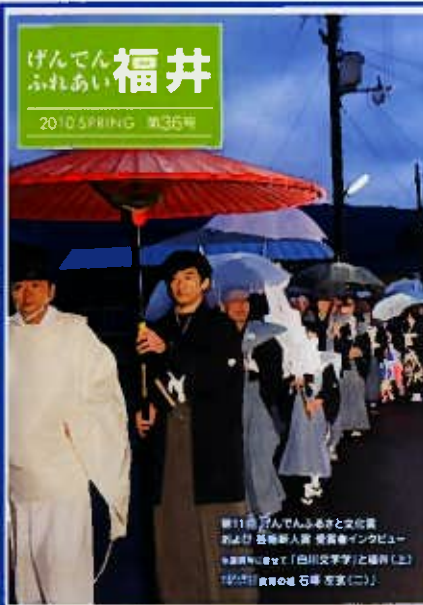
1. 福井県内に活動の本拠を置く団体
2. 構成員（会員）が原則として20名以上の団体
3. 平成22年4月現在で、原則として設立後2年を経過している団体
4. 営利を目的とせず、明確な会計経理を実施、報告できる団体
5. 特定の政治団体、宗教団体、企業に所属していない団体

応募の方法

- 財団所定の「助成事業応募要領」により「推薦団体」の推薦を受け、助成事業申請書を平成23年4月20日(水)まで（申請事業の実施が4・5・6月の場合は3月20日まで）に当財団に提出してください。
- 申請書のほか、事業計画、予算書など添付していただく書類等がありますので、詳しいことは「げんでんふれあい福井財団」にお問合せ下さい。

読者アンケートご回答のまとめ げんでん 福井 第36号

本誌第36号（平成22年3月発行）のアンケートに総数16通のご回答をいただきました。その結果を下表のとおりまとめました。今後も、皆様のご意見をうけたまわり本誌の充実に努めてまいりますので、ご協力をお願いいたします。



第36号で良かった記事

- 第11回げんでんふるさと文化賞及び芸術新人賞受賞者インタビュー 6名
- 「白川文字学」と福井(上) 10名
- ふるさと福井人物シリーズ「食育の祖 石塚左玄(二)」 8名
- 第12回ふるさと大賞 写真コンテスト 5名
- ふくいの伝統行事シリーズ「河原神社神事」 9名
- 敦賀市博物館誌上ギャラリー／30 4名
- 福井の文学碑「作家 関高健」 4名
- 福井の民俗文化「刀根・気比神社の秋祭り」 11名
- 情報ファイル 4名

本誌へのご意見・ご要望

- 白川文字学は読み甲斐があった。
- 県内出身の有名な人の功績の記事は、大変参考になる。
- 大賞以外の写真も、大きく載せて欲しい。
- 伝統行事は古代から伝えられている行事を詳細に報告されていて良い。
- 表紙の民俗行事が魅力です。月号楽しみにしています。
- 福井県の歴史上の人物が紹介されていてとても勉強になり、一気に読めます。
- 日付、金額、数量など、洋数字で統一されていて良い。
- 助成金をいただいてありがたい。今後とも文化活動へのご理解をお願いします。
- 自治体の予算削減が続く中、財団の助成活動は本当に貴重なことだと思います。

財団イベント INFORMATION

日英小学生絵画交流展	敦賀市内の5小学校とイギリス・セラフィールド地区の7小学校の児童絵画を展示	12/4(土)～12/12(日)	敦賀原子力館	敦賀市明神町
		12/14(火)～12/26(日)	げんでんふれあいギャラリー	敦賀市本町
第13回ふるさと大賞写真コンテスト入賞作品展	ふるさと大賞および入賞作品を展示	平成23年 2/1(火)～2/13(日)	げんでんふれあいギャラリー	敦賀市本町
		平成23年 2/18(金)～2/23(水)	ショッピングシティ「ベル」	福井市花堂
文化公演会	講師 幸坊治郎	平成23年 2/6(日)	小浜市文化会館	小浜市連合婦人会と財団共催
平成22年度福井県新人演奏会	公開オーディション	平成23年 2/19(土)	県立音楽堂	福井県文化振興事業団主催 財団協賛
	新人演奏会	平成23年 3/20(日)		